

自然の中で遊び込む豊かな体験をめざして

～「トガリ山のぼうけん」の世界を友達と探究しよう～

木島平村 おひさま保育園 研究発表係

発表者 佐藤 千絵

芳川 亜紀

1. はじめに

下高井郡と下水内郡は県の北端、新潟県と群馬県の県境に位置し、自然に恵まれ、四季の変化が豊かな美しいところです。また、全国的にも有数な豪雪地帯で、雪解けの清らかな水は野菜やお米を豊かに実らせています。山ノ内町、野沢温泉村の温泉、スキー場は全国的に有名であり、他にも、栄村の秋山郷、木島平村のカヤの平高原（ブナの原生林）など自然豊かな観光地としても知られています。

木島平村では平成 24 年、村内に 3 園あった保育園を 1 園に統合し、おひさま保育園として新たなスタートを切りました。開園から毎年、東京大学大学院准教授、浅井幸子先生に来園して頂き、子どもが遊び込める環境についてご指導を頂いています。他にも平成 29 年に自然と関わる保育を目指し、信州型自然保育団体として認定を受け、子どもたちが自然の中で十分に遊び込める保育を目指しています。

今回は木島平村のカヤの平高原を舞台にした、「トガリ山のぼうけん（いわむらかずお文・絵 理論社 全 8 巻）」を基に自然の中で子どもたちがトガリ山の世界をイメージし、楽しみながら感性豊かに遊び込んで欲しいと願い、研究を進めてきました。

2. 研究の経過

自然が多い木島平村は普段から戸外遊びを多くしているが、平成 30 年 4 月の戸外遊びの様子を見ると、年長児は固定遊具で遊ぶ姿が多く、散歩で固定遊具のある近所の公園へ行くことは喜ぶが、散策のような散歩は「えー、嫌だな」「行きたくない」と言い、自ら遊びを考え、見つけ、遊びを創り出すことが苦手な様子が見られた。

午睡前に『トガリ山のぼうけん』の読み聞かせを始めると、子どもたちはすぐに興味を持ち、主人公と同じように「トガリ山に登りたい」「登って一人前になりたい」との声が聞かれた。子どもたちは自ら「トガリ山」がどこにあるのか探したいと地図を見たり、保育園から見える山を眺めたりする「トガリ山探し」が自然に始まっていった。

また、ストーリーの中に出てくる植物、昆虫、動物や気象の変化、時間の経過など、さまざまなことに興味をもち始め「何だろう」「なぜだろう」と疑問を持つようになった。子どもたちは「知りたい」「調べたい」という思いが強くなり、自発的に行動し活動を広げ、知り得たことを友達に伝え、さらに活動を広げ発展させていった。

このように自然の中で遊びながら友達と意見を出し合い、遊びを発展させていく経験を十分にしたいと願い、記録をとりながら研究をしていくことにした。

3. 研究の方法

- (1) 「トガリ山のぼうけん（いわむらかずお文・絵 理論社 全 8 巻）」を題材とし、子どもたちの興味・関心の広がり合わせた活動を展開し、実践を記録する。
- (2) 自然に親しみ、遊びを発展させていく姿を記録する。
- (3) 子どもの遊ぶ姿から「幼児期の終わりまでに育てたい 10 の姿」を記録する。
- (4) 戸外遊びについてどう考えるか、保護者にアンケート調査を実施する。

4. 研究の内容

【事例1】「トガリ山に登って一人前になろう！」

(1) トガリ山を探そう！

年長に進級したばかりの4月4日、午睡前に『トガリ山のぼうけん』の読み聞かせをした。その日の午睡起きに「トガリ山が気になるんだよな」と話す子ども、翌日の昼食後には「昨日のネズミの話、今日も読んでね」と言ってくる子どもがいた。そして、読み始めて約10日後には「私たちもトガリ山登ってみたいな」「トガリ山のてっぺんでお弁当食べたいな」「トガリ山に登って一人前になりたいな」と会話している姿が見られ、「どこにあるか探そう」と話が発展していった。

子どもたちは、主人公や本の中に出てくる物はお話の世界の架空の物としながらも、日本地図を眺めながら「山はたくさんあるから、きっとどこかにあるよ」と話していた。そして、イメージする山を絵に描き、地図を描くことで、友達とのイメージを共有させて山を探そうとした。また、園にいる間だけでなく、帰宅後、家族にトガリ山がどこにあるか知っているかと聞き、自宅にある地図で探した子ども、双眼鏡で自宅周辺の山を見たという子どももいた。

生活の中で見える山すべてが気になり、散歩先、遠足、樽滝の落水、卒園のコサージュに使う内山和紙の紙すき体験など別の目的で訪れていても、そこから見える山を見上げる姿が見られた。しかし、「尖ってない」「ここじゃない」と話し、自分たちのイメージにあう山を探し続けた。



この山も尖ってないな。

・6月13日「高社山がトガリ山？行ってみよう」

本を読み始めた早い時期から園舎の裏庭にある築山を「保育園のトガリ山」と呼び始め、「やったー！てっぺんについた！」と登ったり降りたりして遊んでいた。5月下旬、保育園のトガリ山から良く見える高社山が「なんか気になる」と言い、「行きたい」と話すようになった。



「トガリ山が見つかりますように！」
しかし、この後雨が・・・。

5月30日、散歩で子どもたちが気になる方向へ行ってみることにした。「あっち」と指さし進む方向はやはり高社山だった。しかし途中で雨が降ってきたため園に戻るようになった。子どもたちは帰り道に登り坂だったこともあり、十分に歩いた様子だった。園に戻り子どもたちは、実際に歩いた距離を地図上で確認し、また高社山までの道のりを比較することで歩いて行くことができない距離という事に気が付いた。

歩いて行くことは困難だが、どうしても高社山まで行きたい。子どもたちはどうすればいいか意見を出し合った。そして普段、園外保育で利用するマイクロバスを使いたいと話し始めた。クラスの中に、園外保育の時にマイクロバスの運転をしている方が自分のおじいちゃんという子どもがいた。自分から「俺、ジジに頼んでくる！」と話した。でも、「バスはジジのバスじゃない。あれ、お仕事のバスかな？」そう話す様子に、数人の子どもから「あのバス、役場でみたよ」と声が上がった。すると、母親が役場職員である子どもから「じゃ、私がママにお願いしてみる！」と話し、それぞれが降園後家庭で話をし、翌日、「お願いしておいたから大丈夫だよ」とクラスの友達に報告をしていた。

6月13日、高社山にある木島平スキー場のゲレンデを訪れた。「主人公たちの足跡を見つけて、そこをたどって行けばトガリ山があるかも」と足跡探しが始まった。草が持ち上がった部分が「足跡かも」と考え自分の足を



保育園のトガリ山から。
「ヤッホー！」「お〜い！」

置いてみる姿や、小さな穴を足跡ではないかと思い観察する様子が見られた。また、足跡を探しながら広がる自然の中で、虫探し、植物採取、ワラビ取り、葛のツルで綱引きも始まった。さらに山の頂上を目指したいと、時には草丈が年長児くらいある草むらに入っていくこともあった。4月に固定遊具のない場所での園外活動を嫌がっていた子どもたちが、固定遊具のないスキー場のゲレンデで、自ら遊びを見つけ友達を誘い、遊びを広げていった。

しかし「トガリ山じゃなかった」「あそこはやっぱりスキー場だった」と話し、なかなか見つからない「トガリ山」に、「本当はないのかも」「出たり消えたりするのかも」と消極的になる子どもが出始めたが、「でも、見つけないと一人前になれないよ」と励ます子どもの姿もあった。なかなか達成されない目的だが、諦めるのではなく励まし合ってやり遂げようとする姿が見られた。



みんなで引っ張るよ！！
「うんとこしょ、どっこいしょ」



この草、大きいね。
私と草、どっちが大きい？



草の中に何かあるかな？

・6月20日「オオムラサキって何？」

『トガリ山のぼうけん』のストーリーに「オオムラサキ」が出てくる。そしてわずか出てきた「オオムラサキ」に興味を持ち始めた。午睡前に布団に入って話を聞いている子どもたちは挿絵を見ていない。そのため、植物なのか昆虫なのか、全く別の物なのか分からず、想像だけが膨らんでいた。

5月下旬、近くのケヤキの森公園の林の中で青紫色の花を見つけた。そのイメージが強かったのか、「オオムラサキ」は「紫色の花」「花びらは4～5枚で三角かハート型をしている」「葉っぱははしずく型」「木に咲いている」などとイメージした。しかし、本当はどんな物なのかが分からない。「図鑑で探してみよう」と図鑑を広げるが、なかなか見つからずにいた。



子どもたちが予想した「オオムラサキ」を
保育士が絵にまとめた。

6月11日、昼食後に植物図鑑から「オオムラサキ」を見つけた。予想と違う花に、「ピンクの花だったね」「紫じゃないね」「みんなの思っていたのと違うね」などと盛り上がった。その直後の午睡前の紙芝居の時間、その日の当番が選んできた紙芝居の中に偶然「蝶のオオムラサキ」が出てくる。「蝶にもオオムラサキがあるんだ！」と驚き、今度は昆虫図鑑で「オオムラサキ」を探していた。



図鑑・索引を使って調べてみよう。

二種類の「オオムラサキ」を知ることができた子どもたちは、さらにストーリーに出てきたのは『花』なのか『蝶』なのかどちらなのだろうと考え始めた。「話したら蝶、話さなかったら花」「蝶の方が紫っぽいから蝶かも」「オオムラサキの花が進化すると蝶になるのかも」な

どの仮説を立てた。そこで「もう一度オオムラサキが出てくるところを読めば分かるかも」と考え、読んでみた。「羽で風を起こしたから蝶かも」「ルリシジミと話していたから蝶だよ」「でも、花のほうが好きだけだな」と話しながらも、『トガリ山のぼうけんに出てきたオオムラサキは蝶』と結論を出していた。

わずかに出てきただけの「オオムラサキ」だが、子どもたちにとっては興味深い言葉だったようだ。どんな物が想像し、図鑑で調べ、二種類あるうちのどちらなのかをストーリーに合わせて考えていた。

子どもたちの「知りたい」という思いが一か月ほど続く活動となった。

(2)カヤの平高原に行こう

・7月30日「トガリ山がどこにあるのか、役場に行って聞いてみよう」



カヤの平に行きたい人！
「はい！！」

探しても見つからないトガリ山に子どもたちは、「誰かに聞いてみよう」「木島平のことをよく知っている人に聞いてみよう」と話し合った。そこで園長先生に相談に行き、教育長さんに聞いたかどうかとアドバイスをもらい、役場に出かけた。

役場会議室では教育長さんから「トガリ山のぼうけん」のモデルになった場所が、木島平村内にあるカヤの平高原ということを教えてもらった。

園に戻り、どうやって行くかを話し合った。「歩いて行ったら、夜になっちゃうよ」「じゃ走って行く？」



役場の中も見学しました。

「新幹線は？」「新幹線、そっちには行かないよ」とアイデアを出し合った。また、カヤの平高原に行くために必要な持ち物も自分たちで考え、弁当、水筒、おやつ、帽子だけでなく、テント、布団、扇風機、クマ除けの鈴など予想外の物まで出た。

園からは遠いとはいえ木島平村内の場所を訪れるために、子どもたちは布団やテントが必要と考えたのだろう。「(主人公は) 朝出発して、昼になって、夜になってまた朝になったでしょ」と話していた。子どもたちのイメージでは、カヤの平高原に行くことは主人公と同じだけの日にちと時間がかかり、泊りがけの旅になると考えたようだ。いよいよ本の舞台へ行くことに期待がふくらみ、主人公に自分を重ね、ストーリーと同じような壮大な旅に出かける気分になっていたのだと思う。

・8月21日「カヤの平高原へ行こう ～ブナの森を冒険しよう～」

ブナの森を散策し、往復約3キロの道のりを歩いた。散策は、引率して頂いたガイドの方にポイントごとに説明をしてもらい、ブナの実、トガリネズミやムササビが巣にしそうな木の穴、豊富な種類のキノコ、大きなナメクジ、トンボ、シャクトリムシなどストーリーに出てくる植物、昆虫などを実際に見て身近に感じる体験をした。



ブナの森をいっぱい歩いたよ。

ブナの森に続く林道を歩きながら「主人公たちもここ歩いたのかな？」と子どもたちは空想の世界を楽しみ、長めの登り坂では、疲れてしまった友達の手を引き、助け合う姿も見られた。そんな疲れている時でも「これで一人前になれるかな？」「一人前になるって大変だな」「これだけ大変なんだから、一人前になれるなかったらおかしいよ」と会話し、空想と現実が重なっているようだった。

子どもたちの中にはしっかりと『トガリ山のぼうけん』があ

り、現実の世界にしながら空想の世界のイメージも持ち、散策をしていたように感じた。

十分に散策を楽しんだ子どもたちだったが、「トガリ山探し」という点ではまだ納得していなかった。マイクロバスでカヤの平高原に行ったことで標高の高い所に行った感覚が感じられず、「トガリ山じゃない」「カヤの平って嘘なんじゃない？」と話す様子があった。散策した場所は森の中で木に覆われ、マイクロバスを止めたり、お弁当を食べたりした総合案内所周辺からも目立った山が見えず、子どもたちのイメージする『尖った山』がなかったため納得できていない様子だった。



この木の穴に何かいるかな？



この苔、フワフワしている。



「ブナの実」ってどれ？

・春～秋



この虫、
なにかな？



5月頃から園庭に出る時には、ミニ図鑑を持って出て行く子どもたちの姿が見られるようになり、本に出てきた昆虫や植物の発見を楽しむようになった。特にテントウムシに興味があり、背中の模様がいろいろあることに気付いた。テントウムシを見つけるたびに近くの友達に伝え、みんなで観察していた。そして、ストーリーに出てくるテントウムシと同じ模様を見つけると、「みんなに会いにトガリ山から来てくれたんだ」と話し、戸外遊び中は連れて歩いていた。今までの子どもたちならここで「飼いたい」と話し始めるが、この時は「トガリ山に帰れなかったらかわいそう」と話し、遊び終わると逃がしている姿があった。

子どもたちは身近な環境で見つけた昆虫と、ストーリーが結びつくことで、昆虫も生きていて、自分達と同じように遊んでいると考えたのではないだろうか。昆虫を丁寧に扱っている子どもたちの姿から、生き物を大切にする気持ちが育っていることを感じた。

・9月11日「二度目の『トガリ山のぼうけん』に行こう」

トガリ山のぼうけん全8巻を読み終えた。すると、「もう一度最初から読もう！」「もう一度冒険に行こう！」「もう一回読めば、またなんか違う発見があるかも」と話し、「二度目の冒険！」と言って最初からもう一度読むことに意欲的な姿を見せた。

読み進めると、「あれ？こんな所あった？」「この後、大変なことになるんだよね」「あれ？ここから天気、変わっていたんだ！」などという、発見の声が聞かれることもあった。

またこれまでは、子どもたちに自由な想像でストーリーの世界を楽しんで欲しいと願い、あえて挿絵を見せなかった。一通り読み終えたところで『トガリ山のぼうけん』の本を家庭に貸し出しができるようにし、クラス内にも子どもたちが手に取りやすい場所に本を用意した。家庭に借りていく子ども、自由遊びの時間に自分で読む子ども、挿絵をじっくり見る子どもと、午睡中に読んで貰うだけでなく自ら本を手にする姿が増えていった。

本の貸し出しをすることで、保護者からは「子どもが話していたことが何か分かった」「どんな本なのか気になっていた。借りられて良かった」などの声があり、子どもの活動を保護者と共有することができた。

・10月10日「カヤの平高原へ行こう ～トガリ山の知っている人に会いに行こう～」

夏に家庭でカヤの平高原を訪れた子どもが「カヤの平高原に、いわむらかずおさんのことを知っている人がいた」「『トガリ山のぼうけん』の本もあった」と話した。その話を子どもたちは興味深く聞き、さらに「私たちも行って話を聞きたい」「もう一度カヤの平高原へ行こう」と話しがまとまり、二度目のカヤの平高原行きが決まった。

カヤの平高原総合案内所の方に会い、著者のいわむらかずおさんがカヤの平高原に来ていた頃の話聞いた。その中で「カヤの平高原は主人公が旅をした場所のモデルになっているが、山がどれなのか、いわむらかずおさんからは聞いてない。ライチョウが出てくるから、木島平にある山ではなくもっと高い山なのかもしれない」と話があった。



カヤの平高原でお話を聞いたよ。



フクロウの鳴き声できるかな？

子どもたちは「主人公はカヤの平高原を歩いて行って、木島平じゃないライチョウがいる高い山に登った」と話すようになった。さらに、「木島平にないライチョウのいるような高い山に登るのは、今は無理かも」「迷子になっちゃう」などの声が聞かれた。そして、「中学生とか、大人になったら登る」「今はお昼寝でトガリ山に登った夢を見る」と話し、今、登るのではなく、未来に目標を伸ばすことでなんとか納得しようとしているように見えた。

(3) どうしたらトガリ山見つけられるのかな？

一度はあきらめたかのように見えていたが、1月になり、「やっぱり、トガリ山が気になるな」との会話が再び聞かれるようになった。やはり、子どもたちの中では結論は出しておらず、あきらめきれていない様子であった。

年末年始の休みに「富士山を見てきた」と言う子どもがいた。その話を聞いて「日本で一番大きな山の富士山が、トガリ山かもしれない」と考え、さらに「富士山にライチョウがいればトガリ山かも」と、カヤの平高原総合案内所の方に聞いた『ライチョウがいる山』ということがトガリ山探しのキーワードとなった。

ライチョウについて図鑑やインターネットを使い調べ始めた。しかし、富士山にライチョウはいないことが分かった。さらにライチョウのいる山は、日本国内に複数あることも分かり行き詰ってしまった。



インターネットでライチョウのこと調べてみよう！

・2月7日「著者のいわむらかずおさんに聞いてみよう」

どうしてもトガリ山がどこにあるか知りたいが、見つからず、手がかりもない。すると、「トガリ山のことをよく知っている人って誰だろう？」「いわむらかずおさんに聞いたら分かるかも」と、著者に直接聞きたいと話ようになった。いわむらかずおさんが住んでいる場所は長野県外である。「新幹線で行こう」「車で行こう」と話す子どもたちだったが、保育中には不可能であることを伝えた。すると「お手紙に『トガリ山どこですか』って書いたら教えてくれるかも」と話す子どもが出てきた。

そこで手紙を書いて送ることになった。手紙には、慣れない文字で、「とがりやまはどこにありますか？」と書いてあったり、トガリ山に関係した絵が紙いっぱいに描かれたりと子どもたちの切実な願いが伝わってきた。



この字、どうやって書くの？
(平仮名を表で確認しながら)

3月7日、いわむらかずおさんから返事が届く。手紙には『みんなのころのなかにある「山」でしょうか』と書かれていた。

実在の場所を探し続けていた子どもたちに、「心の中の山」と抽象的な返事に対してどう考えるのか様子を見守った。しかし、子どもたちは『トガリ山のぼうけん』を書いた著者がすべてを知っていると考えていた。著者の言葉は納得できた様子だった。保護者や他のクラスの保育士に「トガリ山、どこにあるの？」と聞かれると「心の中！」と答えている姿が見られた。

著者から直接返事をもらったことでようやく子どもたちは、めざしていた答えにたどりついたのだと感じた。

・2月15日～「トガリ山を作ろう！（協同製作）」

みんなが思っているトガリ山はどんな大きさの山か、油粘土を使いトガリ山を作って表現した。最初は個人で作っていたが、「これじゃ小さい」と話し「合体しよう」と友達に提案し数人で合わせ始めた。2～3人で合わせても小さい。「そっちの山とこっちの山、一緒にしよう」と声を掛け合いさらに人数が集まった。最終的に年長児36人全員の粘土が集まり、一つの高い山となった。



最初は一人。



「合体しよう！」



みんなの粘土、
一緒にしてみよう！



36人の粘土で
大きな山ができたよ。

油粘土を使ったままだと粘土遊びをしたい時に困るということで、紙粘土でもう一度作り、さらに色も付け山を作った。しかし山だけでは何か足りないのではないかと考え、「主人公たちが旅をした森とかがいるよ」と話し、トガリ山の周りに何があるかを考え、森、池、滝、川、岩をグループに分かれ作成した。「水どうやって流す？」「岩、どんな形がいい？」「滝に苔、生えてるのは？」などと相談をしながら製作を楽しんでいた。それぞれで作成したものを台に配置し、さらに散歩で集めた松ぼっくりやトチの実も配置し完成させた。



紙粘土で作った山に
色をつけよう。



滝はこんな感じでどう？



分担して作った物を
合わせてみよう！

・3月22日「一人前になれた？」

3月15日ジオラマができあがり、そこに自分の写真を自分の分身として、山の山頂に一人ずつ立てた。その後しばらくは自由に自分の写真を森の中で遊ばせた。木のでっぺんに登らせてみたり、川で泳がせてみたり、もう一度山に登ったりと、いつまでも遊びを楽しんでいた。



やったー！完成したトガリ山の
てっぺんに、登ったよ！

おそらく一年間活動してきたことが、子どもたちのイメージをさらに深くし、写真とジオラマを使うことで、お話の世界に入った気持ちになっていたのと思う。

『トガリ山のぼうけん』をテーマにして活動してきた年長児に、当初の目的だった「一人前になりたい」についての現在の気持ちはどうなのかを聞いた。「みんなで作った山に登った」「心の中で登った」「カヤの平に行った」などの理由から一人前になれたと考える子ども、「まだ自分の足で登っていない」「まだ山に登っている途中だから」



パパ、ママ！私がどこにいる
か分かる？（卒園式での様子）

ら」などという理由からまだ一人前になっていないと考える子どもがいた。

子どもたちの思いはそれぞれ違っていたが、一年を通して取り組んだ活動で子どもたちがどんな経験をし、成長をしたのかが重要だと思う。

完成したジオラマは卒園式に展示をした。登園してすぐに親子でジオラマを眺めたり、わが子の写真を探したり、記念写真を撮って過ごしていた。

《考察》

- ① お話の世界と分かりながらも、「でも、どこかにトガリ山があるのではないか？」と子どもたち自身が立てた仮説に基づいて行動をしていた。目的を達成するために地図を見たり、絵で描いたりすることで友達と山のイメージを共有させ、実際に身近な山を見ることでお話の世界と現実の世界を重ねて考えることが遊びとなり、その世界を楽しんでいた。
- ② 固定遊具がない場所に意識して出かけることで、自然物を取り入れ、自ら遊びを作り出す体験ができるようになった。
その後園庭で遊ぶ時には、固定遊具で遊ぶだけでなく、身近にある自然物を上手に遊びに取り入れる姿が見られるようになった。
- ③ カヤの平高原は住宅地から離れ、家庭でも訪れたことがない子どもが多かった。（年長児 36 人中訪れた経験あり 6 名）保育園で訪れることで村内にある施設を知るきっかけとなった。またガイドをお願いした方に、『トガリ山のぼうけん』を読んでこの活動につながっていることを事前に伝えた。ガイドの方も本を知っており、子どもたちの興味に合わせたガイドをしてくださった。ただの散策ではなく現実とお話の世界を重ね合わせながら楽しむことができる活動となった。
- ④ 友達と協力し合い自発的に活動を広げる中で、話し合いの場面が多く見られた。友達の意見を聞き、「その考えいいね」「〇〇ちゃんすごいね」「じゃ、みんな試してみればいいよね」と互いを認め合う姿が見られた。どんな意見を言っても否定されない、認めてもらえる安心感から積極的に発言をし、アイデアを出し活動に参加する姿が見られた。
- ⑤ 子どもたちの「知りたい」という思いが著者に手紙を書く活動に発展した。著者から直接返事が届く経験から、手紙が届く喜びや、返事を読んで感動する体験ができた。
手紙の返事は「心の中の山」と抽象的な答えだった。しかし、一年間トガリ山を探し求め、活動してきた子どもたちだから、「心の中の山」を想像することができたのではないだろうか。「心の中の山」と目に見えない形の山を、自分たちで想像し協力し合ってジオラマのトガリ山を作り、立体的な目に見える山となった。そこに写真の自分を置くことで自分自身がトガリ山の世界に入ることができ、活動をやり遂げた達成感へとつながった。
- ⑥ ジオラマ作成中に保護者からは、「どんな物ができたのか見たい」と言われた。保護者も子どもたちの活動に、興味を持っていることが分かった。活動を通して一緒に、子どもの育ちを共有することができた。

【事例2】「保育園にトガリ山を作ろう！」

8月、10月とカヤの平高原へ行き、子どもたちはとても遠いことを知り、保育園で行きたい時にすぐ行ける場所ではないことを感じた。（園からカヤの平高原まで、片道40分～50分ほどかかる）もっと簡単に行けたらいいなという思いから「保育園にトガリ山を作ろう！」と考え始めた。

話し合いが始まった頃は、カヤの平高原のブナの森のような森を保育園に作りたいと考え、「ブナの種を蒔いて森を作ろう」と話していた。保育園の畑のミニトマトやキュウリと違い、木を育てるために種で蒔いて、森のようにするには時間がかかることを保育者から伝えた。すると、「みんながお父さんお母さんになって、自分の子どもがおひさま保育園に入って、保育参観の時に森になったかな？木どうなったかな？って見ればいい」と提案があった。早速散歩で拾ってきたどんぐりとトチの実を蒔いた。

でも遊びたいのは今なので、種を蒔く他にどうやって保育園にトガリ山を作るかの相談をした。



蒔いた木の実に水くれをしよう。

・10月上旬～11月中旬「保育園にトガリ山を作ろう」

保育園にトガリ山を作りたいと考え始めた頃は、園内に森を作ることを中心に考えていた。しだいに種を蒔く以外の方法を考え始める。「カヤの平からブナの木もらってくればいい」「せっかく大きくなったのに、もらってきたら、カヤの平からなくなっちゃうから悲しいよ」「それに、カヤの平の物は採っちゃいけない決まりでしょ」（国立公園のため採取は禁止されている）「じゃ、ケヤキの森公園からもらってくる？」「台風の後に行った時に抜けちゃった木あったから、あれ貰ってくればいいよ」と、どこからかもらってくる方法を考えていた。そこに「みんなが木になればいい」「段ボールで木をいっぱい作ればいい」というアイデアも出始め、「いろいろな生き物がいたら楽しいかも」と木を貰ってくる以外の意見もあり、会話が盛り上がっていった。

話し合いを進めていく中で、トガリ山ができれば全園児に来てほしいと考え始めた子どもたちは、「保育園のみんなが遊びに来て、喜んでもらうには何が良いか」と話し合った。「トガリ山と書いた看板」「動植物の看板」でトガリ山の雰囲気を出し、築山の上からのびる滑り台、ムササビの巣をイメージした玉入れ、手作り双眼鏡、手作りカメラ、大きなトチの実やキノコを用意することにした。



いろいろな動植物の絵を描いて、看板を作ろう。

いつの間にか「森を作る」という目的から、『保育園のみんなを招待し、喜んでもらうにはどうしたらいいか』という目的へ変化していた。

素材選びから子どもたちが行い、「木で看板作ったら？」「もし、倒れて小さい子にぶつかったら危ないよ」「紙は？」「雨が降ったら濡れちゃう」など意見を出し合い、発泡スチロールや段ボールなどで作ることに話がまとまった。

年長児なりに小さい子達のことを考え、安全面や遊び方を予想して話し合っている姿が見られた。



手作り滑り台。ガムテープを貼った面と、貼ってない面、どちらの方が良く滑る？

・11月20日、22日「トガリ山ができたよ。みんな遊びに来てね！」



協力して用意・片付けをしよう。

20日は2歳児、22日は全園児を招待した。

登園後すぐに外へ飛び出していった子どもたちは、事前にどこに何を置くか話し合っていたことで、子どもたちで用意がほぼできた。用意が終わると各クラスをまわり、「トガリ山に遊びに来てね」と声をかけたり、未満児クラスに迎えにいったりしていた。

遊びに来た子どもたちは、手作りすべり台で遊んだり、玉入れごっこをしたり、手作り双眼鏡をのぞいたりしながら遊び始めた。年長児も案内をしたり、小さい子の面倒をみたりしながら一緒に遊んで楽しんでいた。

翌週、また遊ぼうと築山周辺へ走っていった年中児が、「あれ？今日はない」と残念そうにしていたとの話を年中組担任から聞き、

そのことを子どもたちに伝えた。「もう一度出して、みんなどうぞってすればいいよ」と話し、滑り台など遊べるように用意した。その日もいろいろなクラスが遊び、その中で段ボール滑り台が破れてしまった。自分たちが頑張って作った物が壊れてしまい、残念な気持ちはあっただろう。しかし、使っていた小さい子を責めるのではなく、「また作るからいいよ」と声をかけている姿は、異年齢交流だから見られた姿だと感じた。



靴、脱げちゃったの？（2歳児に靴をはかせる年長児）



手作り双眼鏡。
山、見えた？



築山から伸びる段ボール滑り台。
子どもも、大人も楽しめた。

・12月、1月「冬のトガリ山を作ろう！」

子どもたちは、トガリ山を作ったことを全園児に喜んでもらい嬉しそうな様子だった。



試作品のソリ。

「またやりたいな」「でも、もうすぐ雪が降るよ」「スコップで雪、全部どかせばいい」「トガリ山だって雪降ると思うから、冬のトガリ山にすればいい」と、またやりたい思いを見せながらもうすぐ降ってくる雪についても考えていた。

冬のトガリ山にはソリ、雪だるま、休憩できる場所を用意することになった。

まずソリ作りが始まった。段ボール、ガムテープ、トイレトペーパーの芯、スズランテープを使って作りたいと子どもたちは考えた。どのように作るかは個々の発想を大切に、保育士は作る様子を見守った。個人製作する子ども、友達と協力して作る子どもと姿はさまざまだった。形も大きいソリ、小さいソリ、箱型のソリ、板状にしたソリとなり、そこに付く装飾もそれぞれで、思い思いのソリを完成させた。

できたソリで試し滑りをした。使うたびにパーツが取れる、箱型のソリは斜面のわずかな段差が障害となり、横転しソリから落ちてしまい上手く



乗れないなどの経験をした。また何度も滑るうちに、雪で濡れたり、擦れたりして壊れてしまうことも知る。その経験から全園児に使ってもらうソリは箱型よりも板状のほうが安全。さらに、段ボールを濡れても大丈夫な素材で巻いた方がいいなどと話し合った。

・1月25日「冬のトガリ山で遊ぼう」

全園児に来てもらうために朝から積もった雪を踏み固め、雪だるまを作り、ソリのコースを整えた。子どもたちが「テント」と呼ぶ休憩できる場所を用意し、さらに前回のトガリ山づくりで使用した物や、発表会で『トガリ山のぼうけん』の劇ごっこに使った小道具なども利用できるようにした。

全園児が遊びに来た。市販のソリと比べ、手作りのソリは使いにくそうな面は見られるが、繰り返し使用する中で、体を使って乗り方を工夫し乗れるようになっていく姿が見られた。ソリが苦手な子どもはテントに入って遊んだり、雪だるまをさらに作ったりして遊ぶ姿が見られた。

作ったソリは、その後の雪遊びの時にどのクラスでも自由に使えるようにしておいた。外に出ると市販のソリではなく、手作りソリを持って斜面へ出掛けていく姿があった。雪が解けるまで1歳児～年長児まで年齢に関係なく繰り返し遊ぶことができた。



手作りソリ。未満児を抱いて、一緒に乗る年長児。



カラーポリ袋で作った即席テントは休憩所になりました。



《考察》

- ① トガリ山探しは年長児だけで行っていたが、保育園にトガリ山を作りたいという思いから活動が広がり、そこに全園児にもトガリ山を知って欲しい、トガリ山で遊んでほしいという思いも加わり異年齢交流へとつながっていった。
- ② 全園児を招待するにあたり、「みんなに喜んでもらうにはどうしたらいいか」は、子どもたちのなかから自然に出てきたテーマだったように感じる。喜んでもらうためには、どんな物が好きか、どんな素材を利用すれば安全に遊んでもらえるかを考えながら用意をしていた。また、招待した日は未満児・年少クラスの子どもたちを気遣い、年中クラスの子どもたちとは一緒に遊んだ。自分たちの作ったトガリ山に自信を持ち、みんなに楽しんで欲しいという思いがあったように感じる。
- ③ トガリ山に招待した後に他のクラスから、「楽しかった」「また行きたい」と声が聞かれ、年長児には活動への達成感につながった。
- ④ 今回の活動では子どもだけでなく、保育士もすべり台やソリに乗って共に遊びを体験する姿があった。保育士として子どもを見守ることも必要だが、一緒に体験、楽しむことも保育にとって重要であることを感じた。

【事例3】「トチの実で遊ぼう！」

(1) 「トチの実酒のお薬を作ろう」

おひさま保育園では、子どもが転んだり、ぶついたりしてできた軽い打ち身のケガに、焼酎にトチの実を入れて作った民間薬を湿布している。子どもたちにとってその普段から耳慣れている「トチの実酒の薬」と、『トガリ山のぼうけん』に出てきたトチの木やトチの実が同じ「トチ」であることに気が付いた。「トチの実でお薬が作れるの?」「私たちも作ってみたい」と話し、トチの実酒の薬づくりをすることになった。

・9月上旬～9月中旬 「トチの実何個あるの?」

その材料になるトチの実を探しに散歩に出かけ、ケヤキの森公園、村体育館裏の2か所からトチの実を集めた。また降園後に、拾ったトチの実を園に持ってきてくれた子どももいて、保育園に大量のトチの実が集まった。すると、「いったいこれ、何個あるのかな」「数えてみたい」とトチの実を数え始めた。

数え方はどうすればよいかを話し合い、椅子の上やロッカーに並べたり、床に一行に並べたり、子どもたちで方法を提案し合い、その提案を一つ一つ試し、途中で数が分からなくなった、同じ物を数えていても答えが一人一人違ってしてしまうなどの失敗を経験した。

試行錯誤をしながら最終的には、5個ずつ、10個ずつとグループを作りながら数えようと考え、ようやく一箱分(111個)のトチの実を数えることができた。



トチの実がいっぱい!



一行に並べて数えてみよう。



10個集めてみたよ。



10個のグループが
2つあったら?

・9月20日 「トチの実のお薬を作ろう」

数人の子が事前に保健室へ行き、看護師からトチの実酒の薬の作り方を聞いてきた。

作り方が分かったところで、トチの実酒の薬作りが始まった。



ほおずき見つけたよ。

材料になるトチの実を拾ってから半月ほど自然乾燥させておいた。「乾かしたからこんなに小さくなっちゃった」と、タオルでトチの実を拭きながら、乾燥して大きさが変化したことに気付く。

トチの実が30個、ほおずき10個と数を確認しながら瓶に入れた。焼酎を入れ、できたトチの実酒の薬は少し暗い所に保管する。少し暗い所はどこなのか?どこに保管をするか話し合った。カーテンを閉めたらどうかと意見がでて、実際にやってみた。「卒園までずっとお部屋が暗いままは嫌だ!」となり、別の場所をさがす。掃除用具の棚、遊

戯室の倉庫、布団の中、パジャマ袋の中、瓶にタオルをかけておくなどと意見がでるが、クラス内の押し入れに入れておくという事で話がまとまった。

押し入れに入れることで、午睡後、布団などを片付けた後に必ず、押し入れの扉を閉めるようになり、わずかも開いていると、「お薬ができなくなっちゃう」とあわてて閉める様子が見られた。



トチの実をきれいに拭いたよ。



トチの実とはおずきとお酒が入ったよ。



押し入れのトチの実のお薬、どうなったかな？

(2)「保育園のみんなにトチの実をプレゼントしよう」

秋に大量のトチの実を年長児が集めていたことで、他のクラスの子どもたちが気になり「トチの実いいな、欲しい」と言っていた。そのことを知り、「みんなにプレゼントしたい」と考えるようになり、トチの実のキーホルダー作りが始まった。

・2月5日「トチの実キーホルダー作りをしよう」

トチの実に目玉を描き、プレゼント用に用意した。

乾燥で小さくなってしまったことで、0,1 歳児には口に入るサイズのため危ないのではないかと気が付き、どうしたらいいか考えた。「段ボールで何かを作る」「でも段ボールも食べちゃうかも」「ナイロンで巻けば、食べても濡れないよ」「人形とかフワフワした物は？」「ペットボトルでマラカスにしたら？」「ネックレスは？」「鍵盤ハーモニカで曲をきかせてあげるのは？」など、0,1 歳児が危なくないプレゼントは何かを話し合った。話し合いの結果、給食のゼリーなどに使われるカップの蓋を利用したペンダントを作ることに決まった。



トチの実に目を描こう。

・2月 15日「計算機、貸して！」



計算機使ったら、保育園みんなで何人分かるかな？

トチの実のプレゼントは用意したが、これで足りるかが分からない。各クラス前に掲示してある名簿を数えに行き、何組が何人と書き出した。クラスごとの人数が分かり、次はどう考えるのか様子を見守った。午睡後の自由遊びの時間に数人で集まり、書き出した表を見ていた。

1 歳児クラス 12 人、0,1 歳児クラス 11 人は合わせて 23 人だとすぐに分かる子どもがいた。しかし、2 歳児以上のクラスになると数が大きく、計算をすることができない。すると、「俺の家、計算機あるよ」と話す子どもから、保育士に「計算機貸して」と言ってきた。そこで＋、＝、AC がどこにあるかを伝え渡した。すると、年

中 1,2 組の合計、年少 1,2 組の合計と足していき、出た合計同士をさらに足すことを繰り返し、在園児数 159 人と正しく導き出した。

後日、トチの実のキーホルダーを持って各クラスをまわり一人一人に手渡した。「ありがとう」と言われ嬉しそうにしていた年長児だった。年長児がトチの実を持って来ることを楽しみにしていたクラスもあり、ある 2 歳児は貰ったことが嬉しくて、カバンに一度は入れたもののその日は時々出して眺めていた。



ペンダントを
かけてもらった 1 歳児。



2 歳児

保育園のみんなにトチ
の実のキーホルダーを
プレゼントに行こう。



年長児から受け取った年中児。

(3) 3月18日「もうすぐ卒園式。作ったトチの実酒のお薬どうする？」

トチの実酒のお薬は、しばらく置かないと完成しないことを作る時に説明したため、子どもたちは知っていた。いよいよ卒園が近くなり、自分たちが卒園した後のトチの実酒のお薬はどうすればよいか心配を始めた。やはり、「お家に持って帰りたいな」「できれば学校に持ってきてほしいな」という意見も出た。しかし、「私たちは使えないけど、保育園のみんなに使ってもらって行って作ったんでしょ」と作る時に話し合ったことを覚えている子どももいた。まだ完成していないため、保育園のどこに置いておくのがいいかを話し合い、「未満児さんすぐ転んじゃうから、未満児さんにあげる」「作り方を教えてもらった看護師に渡し、保健室に置いてもらう」の二つに意見がまとまった。

卒園式前日 25 日の降園前に、未満児室と保健室に持っていき「ぶつけた時に使ってね」「保育園のみんなで使ってね」と言って渡していた。

《考察》

- ① 大量のトチの実から数への興味が深まり、数えたい、計算してみたいと広がっていった。小学校で学ぶ内容ではあるが、子どもたちの興味に合わせ取り組みとした。数え方、計算の仕方を保育士から提示するのではなく、子どもたちが友達と考え、やってみる過程を大切にした。年長児なりに今までの経験から方法を考え出し合い、工夫しながら取り組む様子が見られ、結果が分かった時の喜びは大きく、満足した達成感を得られ自信につながっていったように思う。
- ② トチの実酒の薬が出来上がるのは卒園後になる。「自分たちは使えないけど、保育園のみんなが怪我した時に使って欲しい」と子どもたちは考えた。また、他のクラスからトチの実が欲しいと言われ、「プレゼントにしよう」でも 0,1 歳児には危なくないプレゼントを別に用意しようと考えたりするなど、年長児として小さいクラスの子どもの思いやり、気に掛ける姿へ成長していることを感じた。

5. 今回の活動から見た子どもの姿

<おひさま保育園 保育目標>

- ・仲良く遊び思いやりのある子ども
- ・人の話をよく聞き、自分の思っていることを話せる子ども
- ・意欲的に取り組み生き生きとした子ども

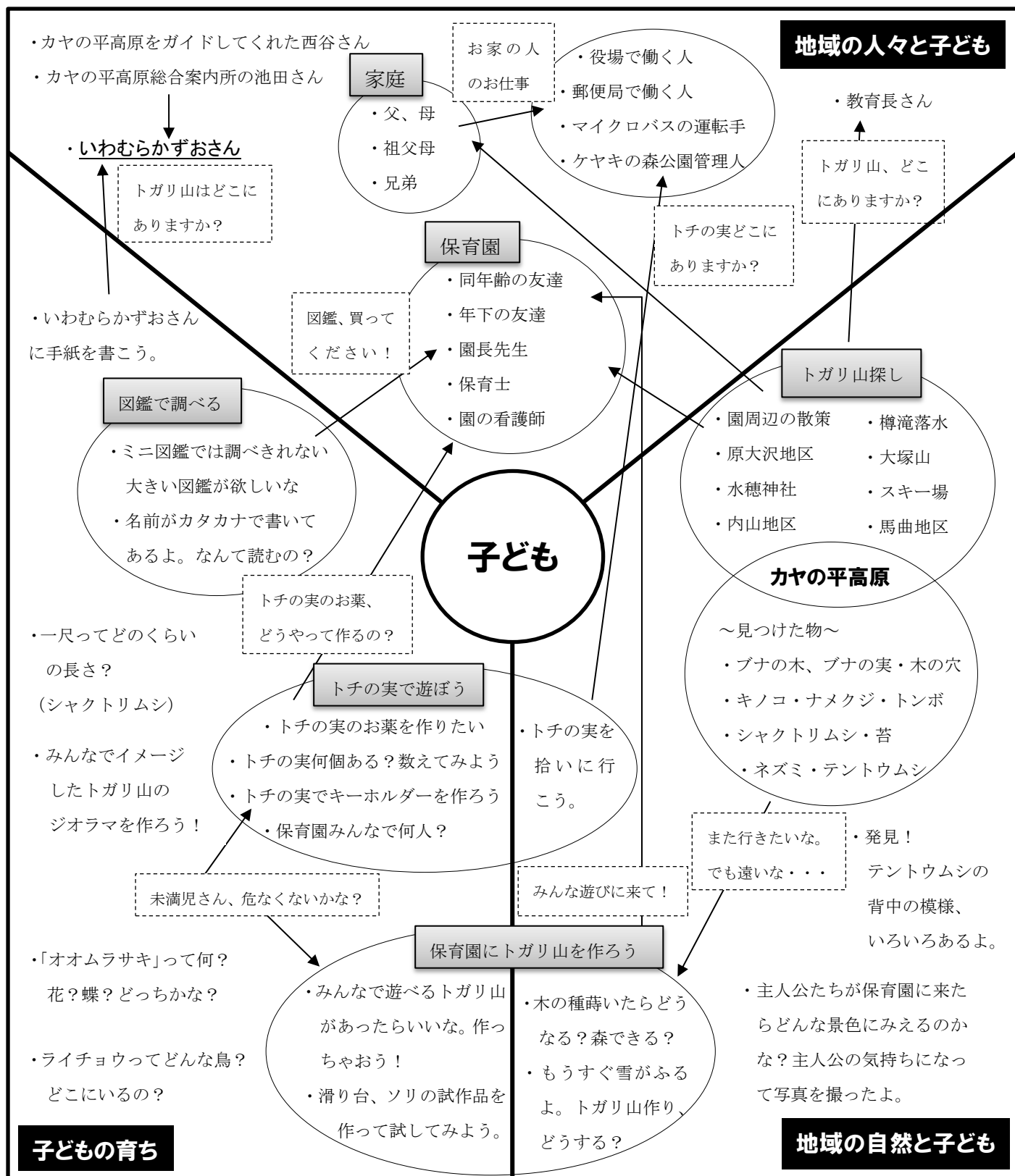
<人権教育目標>

- ・生きる喜びや生命の大切さに気づく子ども
- ・約束を守って、楽しく生活できる子ども

～保育士の願い～

- ・木島平村の豊かな自然の中で、さまざまな体験をして欲しい。
- ・友達と一緒に、遊びの中から興味、関心のあることを見つけ、探究を深める経験をして欲しい。
- ・自己肯定感を高め、自信を持って生活、成長して欲しい。

トガリ山の活動の発展



6. おわりに

木島平の豊かな自然の中で遊び込む体験を十分に重ね、さまざまな経験をして欲しいと願い、『トガリ山のぼうけん』を題材にして一年間活動を展開した。しかし、今回の『トガリ山のぼうけん』を題材とした活動は、最初から年長児全員が参加していたわけではない。興味を持った子どもが調べたり、行動したりする姿を見て活動に加わったり、ストーリーが進むにつれ、興味のある物が出てきて活動に入ってきた子どももいた。そして、協力し合い、伝え合う中で活動が発展し、仲間が増えていった。その中で子どもから見た保育士の立場は「先生」ではなく「一緒に活動をする仲間」だったように感じる。「大丈夫。私たちだけでできるよ。先生は見ていて！」そんな場面が多かった。友達と「なぜ?」「どうして?」と考えたことを、「知りたい」「やってみたい」と思い活動へとつなげる。自然の中で友達と一緒に主体的に活動し探究していくことと、ストーリーの世界観が身近な自然環境に近いことで、実生活での体験と重なり実際に「見たい」「やってみたい」という行動となり、一年間続く長期的な活動へとつながった。子どもたちで意見を出し合い、仮説を立て行動し、その反省に基づいて次の計画を立てる経験を十分に重ねることで、活動への達成感、満足感が得られさらに探究をしていく好奇心へとつながっていったと思う。

活動は卒園で終わりと思っていたが、「小学校へ行っても自分で調べて、発見があったらどうやって保育園に知らせたらいい?」と保育園の電話番号を紙に書いて持ち帰った子どももいた。

活動を夢中にする素材が多いほど、進級、卒園、入学の生活の節目で活動が終わるのではないことを感じた。

さらに、自然の中には多様多彩な素材がある。個々の興味、得意な場面の活動から自信を持って発言したり、行動したりできることで、達成感、満足感が得られ、自己肯定感につながったと思う。

子どもたち一人一人が自信を持って生活、活動ができるような保育をこれからも考えて取り組んでいきたい。



平成 30 年度 おひさま保育園 みどり 1, 2 組 (年長児)

『トガリ山のぼうけん』と子どもたちの冒険

浅井幸子（東京大学大学院教育学研究科）

トガリ山はどこにあるのか。この問いに取り組むことは、おひさま保育園の子どもたちを広範な知的冒険へと誘っている。その過程を特徴づけているのは、『トガリ山のぼうけん』という特定の物語と、おひさま保育園の子どもたちという特定の子どもたちとの出会いである。『トガリ山のぼうけん』の著者であるいわむらかずおさんは、架空の場所であるトガリ山の自然を、木島平村のカヤの平高原をモデルとして描いた。物語では、トガリネズミのトガリィが、そのトガリ山を、「一人前」になるために登る。おひさま保育園の子どもたちはトガリ山とカヤの平高原の重なりを生きることを通して、木島平の自然、歴史、人々の関係の網の目の中に立ち現れる。そして一人前になることと一年生になることが重なりあうアイデンティティの模索の過程を生きはじめる。

この過程の中で重要だと思われることを四つ 述べる。

一つめは、子どもたちの探究の過程が直線的ではなく、行きつ戻りつし、時に横道に入りながら展開しているところである。それは先生たちが子どもたちの声に存分に耳を傾けているから生じる迂回であり、そのことが探究に深みをもたらしている。たとえば8月にカヤの平高原に行った子どもたちは、物語に出てくるキノコやナメクジやトンボに出会い、歩きながら「一人前」になることの大変さをかみしめる。しかし同時に「尖った山」が見つからないから、ここは「トガリ山じゃない」とも考える。その後「トガリ山」が園庭に作られ、トガリ山探しは一段落したかに思えるが、もう一度物語を読む中で、カヤの平を再訪して案内所の方の話を聞く中で、富士山を見た子の話を聞く中で、「トガリ山」はどこにあるのかという問いが幾度も浮上する。この問いは時に潜在し、ふとした拍子に顕在化して、ファンタジー世界と現実世界の行き来を可能にする鍵として機能している。とても良い問いなのだが、その良さは、実は問いそのものにあるわけではない。先生が子どもに伴走し、探究が行きつ戻りつすることによって、問いそのものが育っているのだ。

二つめは、現実世界をモデルとしたファンタジーという絶妙なレンズを通すことによって、子どもたちと木島平村の自然との出会い直しが可能になっているところである。子どもたちにとって、木島平の植物も昆虫も動物も、当たり前のように日々の生活の中に存在している。「トチの実」や「トチの実酒の薬」もそのような身近なものの一つである。それはただ日常の中に存在しているが、『トガリ山のぼうけん』に出てくる「トチ」と重ね合わされることによって、子どもたちの興味の対象として再発見されている。「カヤの平高原」の植物や動物もそうだ。何気なく見過ごす木の穴が、トガリネズミやムササビの巣穴として意味を持ち始める。ファンタジーを媒介することによって自然の見方が変わるのだが、単にファンタジーの舞台に見えてくるというだけでなく、現実世界の細部に目がとまるようになり、いろいろなことに繊細に気づくことが可能になっている。自然科学的なものの見方とファンタジーのものの見方は相互的に深まりうることが分かる。

三つめは、この実践の中で、子どもたちの「有能さ」が十分に発揮されていることである。その「有能さ」は子どもたちに内在したり獲得したりするような能力ではなく、先生たちが調整する関係の網の目の中で、他の人々やツールによって支えられている有能さである。三つの場面をみてみよう。一つめは高社山に行こうとする時に、祖父がマイクロバスを運転している子や、母親が役場に勤めている子が「手配」に動く場面。裏で先生方が動くにしても、何かをしたい時にそれが可能な人に依頼するというのは、具体的な人間関係に支えられた重要な「有能さ」の発揮である。村の人々の密なネットワークが子どもたちの探究を支え、子どもの探究がコミュニティの探究となる場面でもある。二つめはトチの実がいくつ必要かを確認するために、各クラスの人数を合計する場面である。電卓の使い方を教わった子どもたちは、在園児数 159 人を正確に導き出す。そして三つめは、五十音の表を見ながらいわむらさんに手紙を書く場面。二つめと三つめの場面は、電卓や五十音表といった道具によって子どもの有能さが支えられている。子どもにこのような過程における文字や数の使用だろう。大人も周りの人々に支えられ、また本やパソコンなどの道具に支えられてさまざまなことが出来ているのだから、実は子どもも大人も同じなのかもしれない。

四つめは、年長さんの子どもたちにとって「一人前」になるということが持つ意味である。「トガリ山」に登ることで「一人前」になるというファンタジー世界の物語は、一年生になるという子どもたちの生と重なり、それぞれの子どものアイデンティティの模索を導く。その模索は一つの答えに帰結するものではない。「みんなで作った山に登った」あるいは「心の中で登った」から一人前になれたと考える子にとっても、「まだ自分の足で登っていない」あるいは「まだ山に登っている途中だから」という理由でまだ一人前になっていないと考える子にとっても意味を持つ。この実践は、幼小連携や接続カリキュラムの試みとはまた違ったかたちで、5歳児の子どもたちの学びの可能性を伝えているように思う。

「トガリ山はどこにあるのか」という問いに対するいわむらさんからの返事は、子どもたちと先生たち、そしてこの実践を聞いた私たちへの贈り物だ。「みんなのこころのなかにある「山」でしょうか」という言葉に、子どもたちも先生たちも、幾度も立ちかえることができる。それぞれのアイデンティティを求めて、繰り返し「トガリ山」に登ることができる。



『トガリ山のぼうけん』の活動から見た、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿

	『トガリ山のぼうけん』に関する活動
ア 健康な心と体 (領域)健康	<ul style="list-style-type: none"> ・本の主人公と同じように、「トガリ山に登って一人前になりたい」と話し、散歩先でトガリ山を探そうとする。(5月～) ・園生活で打ち身などに使っているトチの実酒の薬と、トガリ山に出てくるトチの実が同じトチの実であることに気づき、身近なトチの実酒の薬を作りたいと話す。(9月) ・園内に作るトガリ山に低年齢クラスを招待するためには、どうしても喜んでもらえるか、安全に遊ぶためにはどうするかなど活動に見通しを持ち、安全な活動をするための話し合いを始める。(10月) ・園舎裏の築山周辺にトガリ山を作ろうと考えたり、ジオラマでトガリ山を作ろうと考えたりと、トガリ山作りという目標に向かって、どこに何が必要かどう用意するかなど考え、見通しを持って行動する。(11月) 
イ 自立心 (領域)人間関係	<ul style="list-style-type: none"> ・園にあったミニ図鑑では動植物は調べきれず、大きい図鑑があれば調べられるのではと考え園長先生に購入をお願いに行く。(5月) ・スキー場(高社山)がトガリ山なのではないかと考え、近くまで行ってみたいと歩いて行こうとする。しかし十分に歩いたつもりでも、さらに遠いことを地図で確認して知る。(5月) ・身近な環境である園舎裏の築山周辺の自然を利用し、全園児で遊ぶために友達と工夫しながらトガリ山を作り上げ、達成感を味わう。(11月、2月) 
ウ 共同性 (領域)人間関係	<ul style="list-style-type: none"> ・トガリ山を見つけるためにどこへ、どんな方法で行くかを話し合う。(6月～) ・カヤの平高原へ行き、トガリ山を見つけるという共通の目的の実現に向けて、行き方や必要な持ち物を考え、話し合う。(7月) ・カヤの平高原は遠く、遊びたい時にすぐには行けない。そこで園内にトガリ山を作りたいと考え、どう作るか話し合う。(8月～10月) ・トチの実の数え方を友達と相談し、協力して数える。(9月) ・築山周辺にトガリ山を作るために、何を作り置くかを話し合うことで、お互いの思いや考えを共有していく。(10月) ・トガリ山を作るという共通の目的に向けて、友だちと協力しながら作り上げることで充実感をもつ。(10月～3月) 
エ 道徳性・規範意識の芽生え (領域)人間関係	<ul style="list-style-type: none"> ・8月のカヤの平高原に一緒に行けない友達がいることが分かり、その友達の気持ちを共感しながらどうするかを話し合う。(8月) ・カヤの平高原に一緒に行けない子どもが事前に下見に行き、その報告を聞いたり伝えたりすることで、お互いに相手の立場に立って話したり、行動したり、共感したりする。(8月) ・一度トガリ山作りをし、他のクラスからの「もっと遊びたい」「またやってほしい」と言う声から、冬のトガリ山を作ったらどうかと考え、行動する。(11月) ・トガリ山で作った遊具に、子どもたちが集まると「順番だよ」「並んで」と必要なルールを考え、伝えようとする。(1月) 
オ 社会生活との関わり (領域)人間関係	<ul style="list-style-type: none"> ・徒歩では行けないスキー場に行くための方法を話し合い、バスを使用したいと考え、自分たちで役場へマイクロバス使用の依頼や運転手の手配をしようとする。(6月) ・トガリ山について木島平村のことを良く知っている人に聞いたらどうかと考え、誰に聞いたらいいか話し合う。(7月) ・教育長さんに会い、トガリ山の場所を教えてもらう。役場を訪れることで公共の施設を知り、社会とのつながりを知る。(7月) ・作者のことを知っている人がカヤの平高原にいることを知り、再び訪れる。話を聞きに行くことで地域の人と触れ合いとなる。(10月) ・自分たちで作ったトガリ山に招待をした年下の子の気持ちを考えながら関わり、案内をすることで、自分が役立つ喜びを感じる。(11月、1月) 

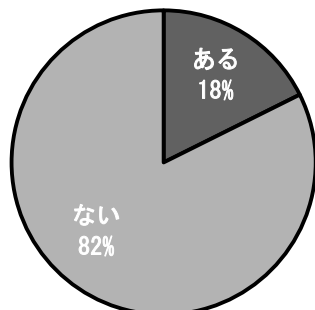
	『トガリ山のぼうけん』に関する活動
カ 思考力の芽生え (領域)環境	<ul style="list-style-type: none"> ・図鑑からオオムラサキは花と蝶があることを知る。トガリ山に出てくるのはどちらなのかを考え、本をもう一度読み、話し合う。(6月) ・トチ酒を薄暗い所で保管する。どこが適しているのかを話し合う。(9月) ・カヤの平高原で話を聞き、トガリ山を登るのに今の自分たちには厳しそうなのではないかと考える。(10月) ・手作りのソリを作る中で段ボールが雪で濡れる、壊れることに気付き、友達と考えを出し合いながら、作り直し、完成させる喜びを味わう。(1月) 
キ 自然との関わり ・ 生命尊重 (領域)環境	<ul style="list-style-type: none"> ・本に出てきた虫、動物、植物を図鑑で調べる。(4月～) ・トガリ山に出てくる動植物を園周辺で見つける。(5月～) ・園周辺でテントウムシを見つけ喜ぶ。また、背中の模様がいろいろあることを知る。(6月～) ・カヤの平へ行きブナの森を歩く。(8月) ・トチの実を集める。(9月) ・園の近くに出たイノシシに興味を持つ。(9月) ・トガリ山探しの手掛かりとなりそうな「ライチョウ」に興味を持ち、どんなところに生息しているか調べる。(1月) 
ク 数量や図形、 標識や文字など への関心 ・ 感覚 (領域)環境	<ul style="list-style-type: none"> ・トガリ山を探して地図を見る。 (日本地図・長野県の地図…4月) (木島平村の地図…5月～) ・図鑑の索引を見たり、カタカナを読もうとする。(6月) ・園からカヤの平までの距離を知ろうとする。(8月) ・集まったトチの実の数を数えようとする。(9月) ・トチの実で作ったキーホルダーを全園児にプレゼントするために、全園児数を調べようと、各クラスの名簿を数えたり、計算機を使って合計人数を出す。(2月) ・ストーリーに出てきた一尺を数えながら進むシャクトリムシに興味を持ち、一尺がどの位の長さかを調べる。(2月) ・一尺サイズのシャクトリムシの模型や、30cmものさしで長さを測って遊ぶ。(2月～3月) 
ケ 言葉による 伝え合い (領域)言葉	<ul style="list-style-type: none"> ・午睡前に『トガリ山のぼうけん』のお話を聞く。(4月～3月) ・家庭で体験した、発見したトガリ山に関することを園で友達や担任に伝える。(4月～) ・『オオムラサキ』に興味を持ち、どんな物なのか調べる。(5月～) ・オオムラサキがどんな物が想像し、イメージしたことを言葉で保育者に伝える。(5月) ・作者の他作品にも興味を持ち、「いわむらかずお」と書いてある絵本を探す。(10月～) ・園内にトガリ山を作り、遊びに来てほしいことを手紙にして伝えようとする。(11月) ・トガリ山がどこにあるのか著者に手紙を書いて聞く。(2月) 
コ 豊かな感性 と表現 (領域)表現	<ul style="list-style-type: none"> ・トガリ山とはどんな山かイメージして絵にしてみる(4月) ・散歩先でみつけたヒマラヤ杉の球果(松かさ)の鱗片を「キノコみたい」「何かに使えそう」と言って拾い集める。(8月) ・トガリ山作りに必要な物(看板、滑り台、カメラ、双眼鏡、ソリ、テント)を友達と協力し、工夫しながら作る。(10月～1月) ・身近にある物や、『トガリ山のぼうけん』に出てきた素材を使ってクリスマスリースを作る。(12月) ・トチの実を使って、キーホルダーを作る。(2月) ・イメージしたトガリ山を友達と相談しながら共同制作でジオラマを作る。(2月、3月) 

アンケート集計結果

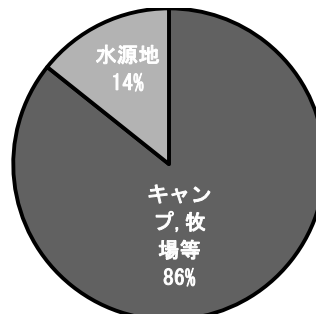
『トガリ山のぼうけん』に関するアンケート結果（対象 年長児 配布 8月）

(1) 年長クラスに在籍しているお子さんについて質問します。

- ・お子さんはカヤの平高原を訪れたことはありますか。

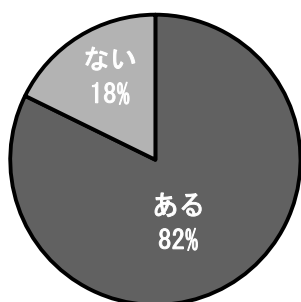


- ・「ある」と回答した方に質問です。訪れた場所はどこですか。

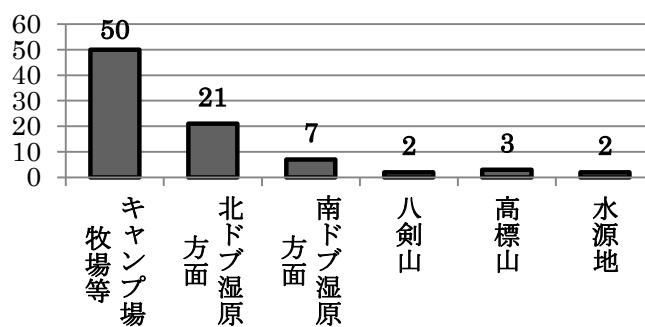


(2) お家の方について質問します。

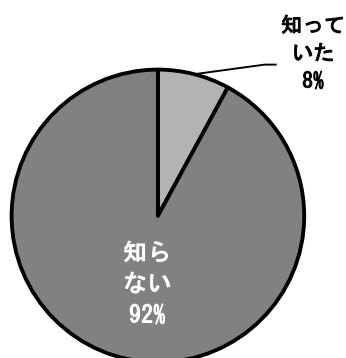
- ・カヤの平高原を訪れたことはありますか？



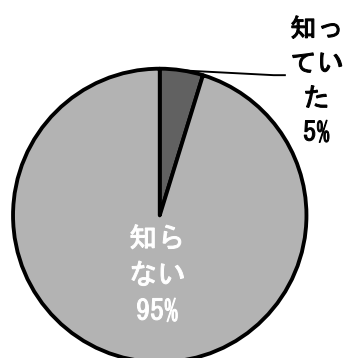
- ・訪れた場所はどこですか？（複数回答可）



- ・『トガリ山のぼうけん』の本を知っていましたか？



- ・『トガリ山のぼうけん』のモデルになった場所が、カヤの平高原ということを知っていましたか？



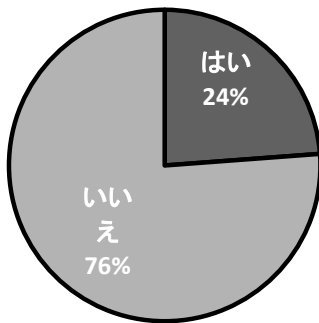
《考察》

- ① 村内にある場所ではあるが家庭では行ったことがない園児が多く、園で初めて訪れる子が多いことが分かった。保護者は訪れた経験がある方が多く、いずれは訪れることができるであろう場所でもあるように思う。
- ② 『トガリ山のぼうけん』は著者が取材にカヤの平高原に訪れ滞在し、本が出版された頃にはカヤの平でイベントがあった。それから時間がだいぶ経過しているため、知らない人も増えて来ている。村に関係していた本として子どもたちに伝えていきたいと感じた。

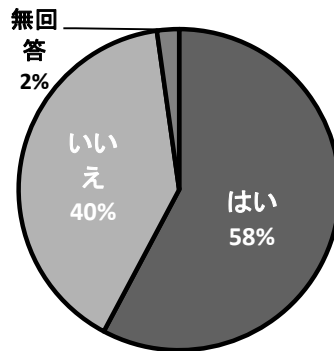
戸外遊びについてのアンケート結果
(対象・全園児 平成 30.4 月、平成 31.3 月配布)

(1) 信州型自然保育認定制度(信州やまほいく)を知っていますか？

4 月

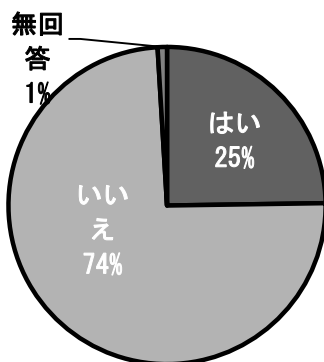


3 月

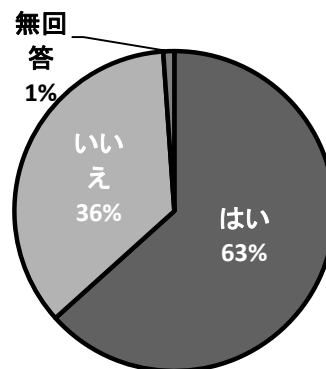


(2) おひさま保育園が信州型自然保育団体として認定されていることを知っていますか？

4 月



3 月

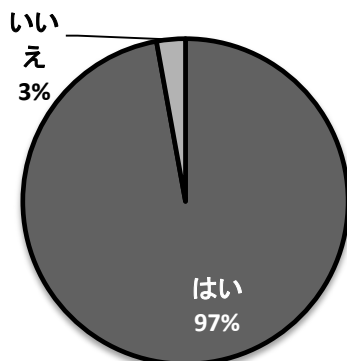


《 考 察 》

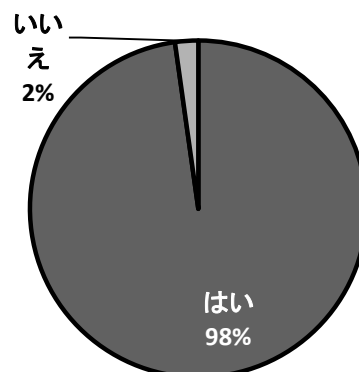
- ① 信州型自然保育認定制度(信州やまほいく)に認定されたばかりだった平成 30 年 4 月は保護者への認知度は 25%と低かった。今までも戸外遊びが中心だったため、信州型自然保育団体として認定されたことで保育が大きく変わったことはなかった。しかし、外での遊びが充実するようにと保護者会有志で、園庭で使えるままごと用のテーブルや椅子、丸太の平均台、土手登り用のロープなどを作っていただいた。保育だけでなく保護者会の協力・活動もあり、認知度が 63%にまで上がったように思う。

(3) 保育園以外に外で遊ぶことはありますか？

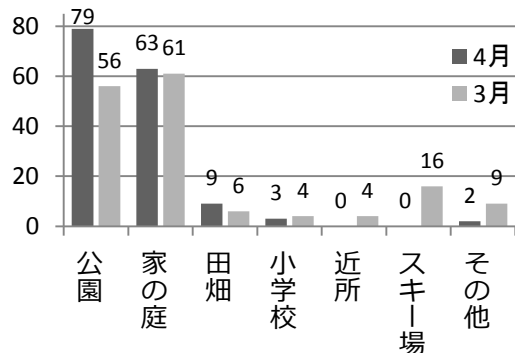
4 月



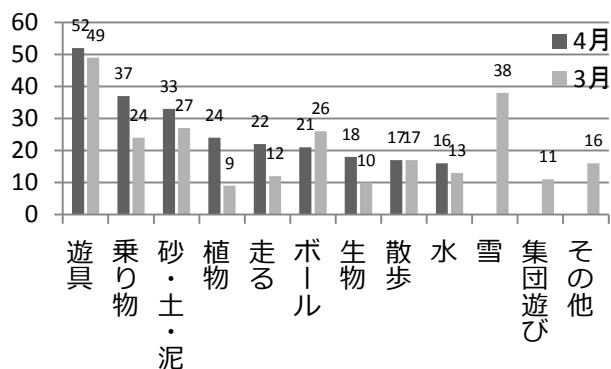
3 月



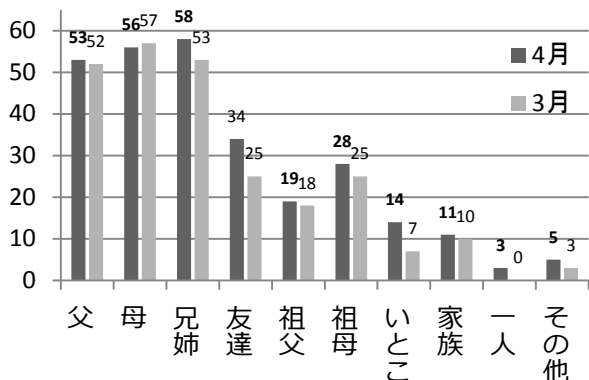
(ア - ①) 「はい」と答えた方はどこで遊びますか？



(ア - ②) 何をして遊びますか？



(ア - ③) 誰と遊びますか？

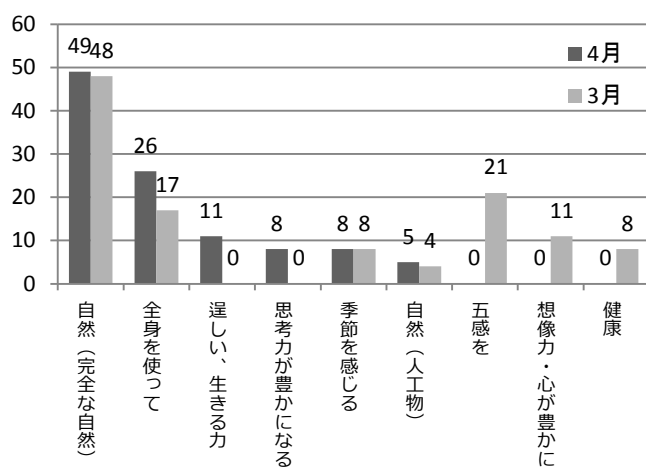


(イ) 「いいえ」と答えた理由はなんですか。

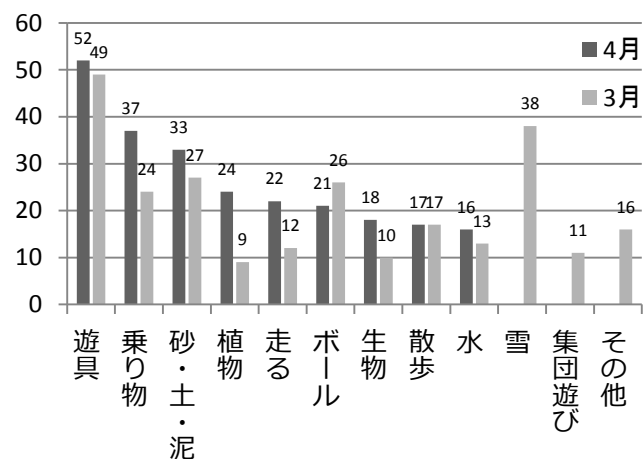
- 4月
- ・公園に行く時間がない。
 - ・外で遊ばせたいが嫌がる。
 - ・危なくて、車が通るので目が離せない。
 - ・遊ぶ場所がない。
 - ・場所があっても、車で行かないと行けないから。

- 3月
- ・家の中での遊びが好きだから。

(4) 『自然と遊ぶ』という事で、どんなイメージを持ちますか？



(5) 室内外問わずどんな遊びをしてほしいと思いますか？

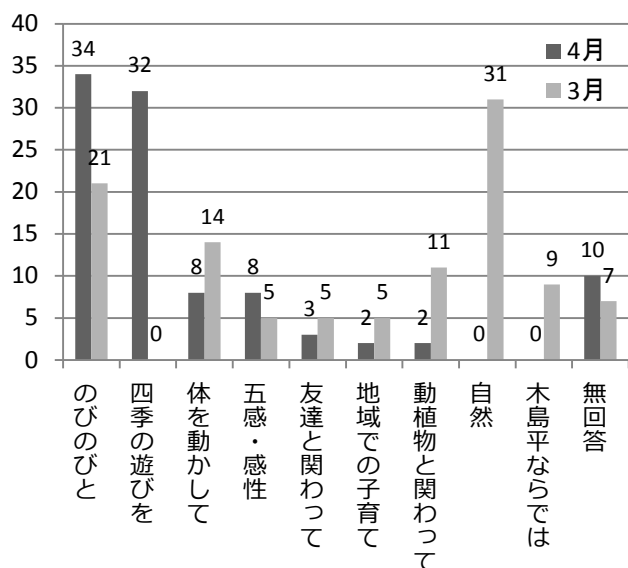


～少数意見～

- 4月
- ・昔の遊び
 - ・本
 - ・TVゲーム以外

- 3月
- ・自然にふれ合う
 - ・大人になっても役立つ遊び
 - ・家では出来ない遊び
 - ・ルールを覚える
 - ・集中して遊ぶ
 - ・発散できる
 - ・自然と数を数える、言葉を覚える

(6) 自然豊かなこの地で、どういった子育てをしたいですか？



～少数意見～

4月・特に考えていない。

- ・生きるという事を感じて欲しい。
- ・成長してからも木島平を忘れないでいて欲しい。
- ・自然豊かなと言えば聞こえはいいかもしれないが、ディズニーランドのようなテーマパークも近くにないので、子どもに不便さを感じさせないようにしたい。

3月・生きる力を育てたい。

- ・とことん遊ぶ。
- ・いい意味で野性的・ワイルド。
- ・体験を通して学んだ知識を使って遊ぶ。
- ・ゲームやスマホではなく自分たちの中で遊びを見つける。

《考察》

- ① 多くの家庭で戸外遊びをしている事が分かった。
- ② 平成 30 年 4 月と平成 31 年 3 月のアンケート結果に大きな差はなかった。しかし、“何をして遊びますか”の問いに 3 月はより具体的な遊びを記入している家庭が増えていた。
- ③ “どういった子育てをしたいか”の問いでも、3 月の回答は具体的な内容になっていた。さらに、4 月には全くなかった「自然」「木島平ならではの」が入ってきている。自然の多い場所は他にもたくさんある。しかし木島平ならではの自然は、木島平でしか体験できない。『トガリ山のぼうけん』は木島平の自然と大きく関係する。子どもたちの活動がアンケート結果にも結び付いたように感じる。
- ④ “家庭で自然豊かなこの地でどんな子育てをしたいか”の問いに 4 月に「自然豊かと言えば聞こえはよいがテーマパークのような場所が近くにないため、子どもに不便さを感じさせない子育て」と 3 月の「遊ぶ時はとことん楽しむ。ゲームやスマホではなく自分たちの中で遊びを見つける」は同一家庭からの回答であり、今回の研究のメインクラスに園児が在籍していた家庭でもある。園から子どもの活動の様子を家庭に発信し、その保護者も積極的に保護者会の有志作業に出席してくれた。一年間で「子どもを喜ばせるために与えられた遊び」から、「自ら作り出す遊び」へと思いが変わったことは大きな変化だと思う。